

新しい生活が始まりました ー会社に行かない生活ー

昨年末、長かった「会社生活」を終えました。今年になってからは、「会社に行かない生活」になりました。たぶん、人生の大きな転換期だと思います。

1月5日に、会社を設立し、独立しました。あえて「個人事業主」ではなく、「株式会社」にしました。「法人格」の取得をしてみたかったからです。

「新しい生活」が、突然始まりました。いまは、「平日のリズム」を徐々に作ってこうとしている段階です。仕事はこれまでとあまり変わりませんが、そんな中で、感じたことを書いてみました。

「OFF」から「ON」への切り替え

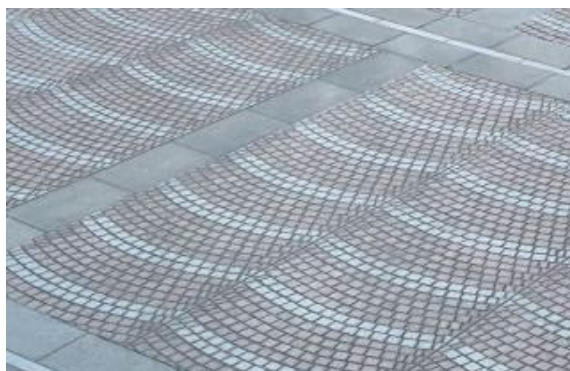
これは難しいと考えていました。でも、あっさりと克服できたように思います。

平日の朝、「会社生活時代」と同じ時刻に起床します。いつものように新聞を読み、身繕いをして家を出ます。「会社生活時代」と同じ道を駅まで歩きます。その途中で、いつものように「出勤する人」とすれ違い、「これから働く人」と出会います。駅近くになると、いつもの通勤風景。この時点で、かなり On モードになっています。

帰りは、いつもと違う道を選びます。まだ半月程度ですが、小さな発見がたくさんありました。通勤しているときには見えなかったものが見えてきます。

右の写真は「日本丸パーク」の床面です。平らなのに、目の錯覚で「波打っている」ように見えます。何回もここを通っているのに、いままで気が付きませんでした。

そんな発見をして、自宅に帰るときには「Office」に出勤するモードに切り替わっています。



「ON」から「OFF」への切り替え

これは簡単だと考えていましたが、意外と難しいです。

昨年までは会社に雇われていた身でした。土日は「休む権利」という意識があり、仕事以外が優先していました。ところが、会社を興してみると、自分がやった分は確実に自分のものになりますが、自分がなにもしないと、何も進みません。自然と「仕事優先」になってしまいます。時間があれば、いつまでも仕事をしています。なので、「読書の時間を意識して取らないと本を読まなくなる」ようになりました。

意外でした。会社生活では無かったことでした（通勤電車の時間も無くなりました）。自己研鑽に読書は不可欠です。これは意識して、「本を読む時間」を作らなければなりません。そう感じています。

同年代の反応

多くの方が驚きます。「65歳で会社設立!?!」。

そして、その後に続く言葉がうれしいです。「俺もまだまだ頑張ろう!という気になった」「そろそろと思っていたけど、ワタシも、もう少し頑張るワ」、そうおっしゃっていただくことが多いんです。なんとなく、同世代に元気を与えているようで、とっても幸せな気分になります。

多くの人がイメージする「起業」と、ワタクシの場合の「起業」は大きく異なります。ワタクシの場合は、いまやっている仕事を継続するための「単なる手段」であって、「純粋な起業」ではないのです。

でも、外の人から見れば、「独立!社長!」です。誤解されても、みなさんに元気を与えることができれば、それはそれで幸せです。

知的財産を生業にする幸せ

65歳で会社を作ることができたのは、知的財産を取り扱ってきたからです。知的財産に関する仕

事はマニアックで、なかなか身に付きませんが、一旦自分のものになると「強力な味方」になります。

「強力な味方」の現れ方も様々です。前知財高裁所長の飯村さんは、知財裁判で身に着けた「ジャッジの経験」が糧になっていますし、長年、明細書を作成してきた独立弁理士先生たちは、「明細書作成能力」が武器になっています。ワタクシも、「これまで付き合ってきた業界の知財情報解析能力」が、独立できた礎です。

これは、マネージャー時代が長い人にはできないことです。専門性を身に着けることができた環境に感謝します。

独立して、たいへんなこと

なにもかも自分でやらなければならないことです。

パソコンのソフト、Acrobatは何がいいか。パソコンの調子が悪くなったらどうするか。会計処理をどうするか。現金出納帳の記載。売掛金集計表の管理。事務用品やコピー紙の調達。銀行でのお金の処理。お客さんとの事務手続き。自分の健康保険の手続き。自分の健康管理、人間ドックの予定と申込み。

いままでお世話になっていた会社の総務部門、事務方がいかに多くのことをやってきてくれたか、それがいま身に染みてわかります。総務のみなさん、事務のみなさん、本当にありがとうございました。感謝申し上げます。

つらいこと

日中、話し相手がいないことです。

これは予想していました。日中は、「ずーっと、ひとり」「ランチもひとり」。生まれてから昨年まで、いつも誰かが周りにいました。今は誰もいません。ひとりです。それが意外とつらいのです。親しい人にメールをしますので、よろしく、お付き合いください。

右の写真のような友達がいると救われますね。



